

連載「星空の宴」を始めるにあたって

関 勉

この物語は二〇〇四年一月一日、高知市上町一丁目の「竜馬郵便局」発行のチラシ「りょうま」に第一回の連載を始めたものです。

「竜馬郵便局」はもともと「上町郵便局」として一九五〇年には偶然竜馬の生まれた家の隣に開局されていました。私も高校生のころから度々足を運んでいたから良く覚えています。そのころ二〇歳代の若き女子の職員が四十年近くも経つて、今の竜馬局に臨時で勤めていたこともありました。竜馬局はその後、電車通り（竜馬の生家のあった）から一つ南側の旧、水道町に移って暫く営業し、そして近年今の旧、通町筋に移転したものです。高知市は元土佐二四万石の城下町ですから「通町」とか「奉行人町」とか「鷹匠町」とか、あるいは「鉄砲町」とかいった昔ながらの懐かしい町名が残っていました。しかし三〇年ほど前、由緒あるこうした町名も市の一方的な政策によって消され「上町」という広い区域に統

合されました。今でもこうした高知の歴史に繋がる町名を懐かしがり惜しむ人が多いようです。

実はこの連載は今回が初めてではありません。ヘール・ボップ彗星の見えていた七年ほど昔二〇回ほど連載したことがあります。今回も伝統的な代代の女性局長の要請で再びこの連載を始めたものです。局員は女の方が殆どですが、三原幸雄さんと言う男性（総務主任）が一人おられ、主にこの連載のお世話をして下さいました。

物語は「竜馬局」ですから坂本竜馬のことから書き始めました。そして大先輩からの激励のお手紙や、戦時中大陸へ去った恩師からの便り等、私の人生に光を与えてくれた手紙、人の心と心をつなぐ手紙の重要性についても触れました。物語はノンフィクションですから当然事実に基づいた出来事です。特に天文現象は曲げられません。しかしストーリーの中で万一にも現実との矛盾を感じられたら、そこは文を面白く読ませるための小説と御考えください。

さて 第一回は竜馬が遭難した京都の四条大橋の近く、近江屋を私が訪れたところから始まります。元醤油屋の昼でも



薄暗い土間に立った時、ふと二階
からの竜馬の絶叫を聞いたので
す。

第一話 竜馬誕生秘話(一)

私は戦前、京都の鴨川にかかる四条大橋の近くの近江屋の跡を訪れたことがあります。

竜馬が慶応三年一月一五日に暗殺された土蔵のこの家は、京都風に天井が低く、惨劇の日、最初の刺客によって斬られた下僕の藤吉が倒れた二階への階段は昼でも暗い土間の片隅にあって、なんとなく陰惨な空気が漂っていました。そして階段の上の方から「ほたえな！」と怒鳴った竜馬の声が今にも聞こえそうな錯覚を感じたのです。

当時、二階で密談を交わしていた竜馬や中岡には、油断があったと言わざるを得ません。刺客が襖を蹴破って部屋に侵入してきた時、そこには正眼に構えた一分の隙もない竜馬の剣が光っていた、、、。と言うのが北辰一刀流の使い手、剣豪としての竜馬のイメージですが、現実にはなかなかそうは行かないようです。

日本の近代化の為に努力し、志なかばで凶刃に倒れた竜馬は天保六年一月一五日、今の上町二丁目で生まれました。

この竜馬の生家は昭和二〇年七月の大空襲で焼失しましたが、私が近くの第四小学校に通っている時、その隣で生まれたとという学友がいて、度々遊びに行った事を覚えています。その頃竜馬の生まれた家は、がらんとした空家になっていて、恐れ多くも私たちは竜馬先生の生家らしき家で鬼ごっこをして、ほたえて（騒いで）いたのです。

天保六年（一八三五年）十一月、竜馬の誕生した頃の上町は騒然としていました。巷の人々は暮れかかった夕空を仰ぎ、指さしながらあれよあれよ慌てふためき、子供らは恐怖のため顔面蒼白となって泣き叫んだり、家に走り込んだりしているのです。「一体何事が起こったのか？」それはまるで浦戸湾に黒船が現れた様な騒ぎでありました。

第二話 竜馬誕生秘話(二)

竜馬の母、幸は其の夜妙な夢を見ていました。

それは夜空に巨大な竜が舞い、その後を一頭の馬が追いかけるように走っている光景です。すると突然竜が渦巻くように早く回りだしたかと思うと、幸の寝ている部屋にどどつと飛び込んできたのです。

「ぎゃー」と悲鳴をあげた幸は本能的にお腹に手をやって夢から醒めました。臨月を迎えていたお腹の子は無事でした。

やがて生まれてきた我が子に「竜馬」と名付けたことは良く知られている事ですが、幸がその夜、悪夢を見た原因は一体何だったのでしょうか？それはこれまでの竜馬を語る歴史書には全く触れられていない驚くべき事件があったのです。

近年の「ハレー彗星」は一九八六年に回帰し、私ははるばると南の『天国に一番近い島』と言われるニューカレドニアまで観測に出かけました。ところが、その一つ前の一九〇年（明治四三年）には異常なまでに地球と接近し、「あわや

世界の終わりか」と世界中を震撼させたのでした。こうして七六年毎に接近するハレー彗星の足取りを遡っていく時、私はある事実を発見し啞然としました。なんと竜馬が生まれた一八三五年一月一日、近日点に迫ったハレー彗星は、まるで悪魔の跳梁するが如く、竜馬の町「上町」の上空にその異様な姿を漂わせていたのです。「奔竜天馬の如く活躍せよ!」気丈夫な幸はこのような願いをこめて我が子に「竜馬」と命名したことは想像に難くありませんが、三三歳で他界した竜馬は勿論この名付け親となったハレー彗星を知らないはずです。しかし昭和の初期、桂浜に立てられた竜馬の銅像は一九八六年、初めてハレー彗星の回帰を迎えることとなるのですが、そこに実に奇妙にして微笑ましい事件が待ち受けているのでした。

第三話 竜馬の視線(一)

一八八三年一月十五日、竜馬の生まれた上町一丁目の館の上に一匹のホウキ星が立ち昇っていました。ホウキ星は天高く長い尾を引きながら、やがて宇宙の彼方へと移動していききました。これは時代を動かした男「竜馬」の人生での門出を称えるに相応しい光景であるとともに、風雲児竜馬を象徴する風景でもあったのです。日本の近代化を求めて時代を駆け抜けた男、「竜馬」は天体で言えばまさにホウキ星そのもので、この年のハレー彗星も世間の注目を浴びながら勇壮に宇宙を駆け抜けていったのです。

時代は移って一九八六年、あれから三度目のハレー彗星が帰還した時、それを日本で最も早く発見したのは芸西村の「芸西天文台」でした。その事がマスコミによって広く報道されたため、ハレー彗星を見ようと日本各地から大勢の人が天文台や天下の景勝、桂浜に集まってきました。その中にはるばると東京からやって来たという二人の若い女性がいきました。

「私たちは今世紀最大の天体ショーと言われるハレー彗星を見たくて高知県に来たのですが、東を見ていいのやら西を見るのやら全く分からない素人です。どうか私たちを指導して下さいませ。」
という問いに対して私は、

「ハレー彗星を見たいならぜひ桂浜に行って坂本竜馬に習ってください。竜馬は先見の明をもって常に新しい時代をリードして来た人です、きっと最新の情報をもたらしてくれるでしょう。」

と、聊か突飛とも無責任とも言える返事をしてしまったのです。

こうして竜馬が生まれた年から数えて三回目の接近に当たる一九八六年の春三月のある朝、黎明を目前にしたここ桂浜には実に一〇〇人を越す大勢の人たちがハレー彗星を見ようと集まっていました。その群集の中に一際高く聳え立ち幽かな黎明の光を受けて輝いている竜馬の銅像の眼は、一体何を見つめているのでしょうか？『夜空を舞う龍』たるホウキ星から名前をもらい、不運にも未だそれを見ることの出来

なかつた竜馬の銅像の上に、時々刻々と天象は移り、やがて
壮大なドラマが展開されようとしていたのです。

第四話 竜馬の視線(二)

時あたかも一九八六年三月六日の未明、ここ桂浜に集まった群集の中からどつと歓声が上がりました。それは、まるで初日の出を拝んだような荘厳にして新鮮な歓声でした。桂浜の高台に立つ竜馬の銅像は、思えば一八三五年の竜馬の誕生以来、実に一五〇年振りに、天下の景勝、桂浜で、自らの名付けの元となったハレー彗星と対面を果たしたのです。

その事があって約一カ月後の四月、東京の女性から一通の手紙が届きました。

「拝啓 御免ください。先日はハレー彗星のことで色々とお世話になり有難う御座いました。名勝桂浜で竜馬とともにハレー彗星を見ることが出来た感激は一生忘れるものではありません。正に竜馬の視線の方角から正しく彗星が出現しました事は、ただ驚き以外の何者でもありませんでした。桂浜の上空に現れたハレー彗星は正に竜馬が新時代を求めて天を駆けるような勇ましく、そしてすがすがしいもので御座いました。それにしましても一つだけ質問が御座います。竜馬

はハレー彗星を見つめつつ、右の手を懐に入れていましたが、あれはなにを取り出そうとしていたので御座いませうか。もしご存知でしたらお教えくださいませ。」

この質問に対する私の答えは一風変わったものでした。

「面白いことにお気づきになりました。竜馬は懐に短筒をかくしていた、との説もありますがこの時代に刀や銃を取って戦うのはもう古いと考えていたのです。外国との交流を望み、海援隊長として海に乗り出していった竜馬は、常に南蛮から渡って来た小型の遠メガネを懐にしていました。そしてハレー彗星接近の朝、正にそれを取り出そうとしている姿こそ平和主義者としての彼の姿に相応しい光景と私は考えているのです。」と。

時は移って二〇〇三年の秋一〇月、竜馬の銅像のそばに建てられた櫓に登りました。竜馬の眼と同じ高さで見る秋の海は、あたかも彼の思想を象徴するかの如く限りなく広がっているのです。

第五話 竜馬と新撰組

当時の徳川幕府にとって、幕府を転覆さす恐れのある竜馬は当然危険な存在で、常に幕府の守護職にあつた新撰組からつけ狙われていました。京の近江屋での竜馬と中岡慎太郎暗殺の下手人として、新撰組の原田左之助が疑われたことがあります。実際には、新撰組は斬りあつたことはありません。

ところが宇宙では局面がちがいます。一九八二年一月三日、芸西の天文台で発見した小惑星（2835）に、『竜馬』と命名し、国際的に認められたのですが、その後一九八九年に突如出現した小惑星『新撰組』が、こともあろうに竜馬の軌跡を追って刻々と迫り始めたのです。追つては切り込み一番隊長の沖田総司に剣豪として名高い永倉新八、せつかく星になつて宇宙を漫遊し、外国の星たちとも交流して、その見聞を広めていた竜馬に又しても凶刃です。

竜馬危ない！

どうしたら竜馬を救えるだろうか？ 思案に暮れた私は

咄嗟にある名案を思いついたのです。

竜馬の命日十一月十五日には、毎年上町二丁目の
誕生地でお祭りが行われている。



第六話 お竜が行く

私が初めて歩いたところの琴が浜（安芸群芸西村）の海岸は、白砂青松の素朴な美しい海岸でした。竜馬の生まれた一八三五年に植林されたと言う松林は、風の強い日にまるで琴のような音を発すると言うので、その由来があります。

今は海水プールや、野外劇場が出来たことで有名になりましたが、実はその砂浜の一角にお竜姉妹の銅像が建っていて、大空にむかって手を挙げています。その姿は紛れも無く、星になって大宇宙を飛ぶ竜馬恋しさのゼスチャーと思われれます。

折角宇宙を漫遊している今も、新撰組に追われ続けている竜馬。その竜馬を何とか助けなくては、と思っていた私の脳裏に一つの名案が生まれたのです！



(そうだ！お竜を飛ばそう。) かつて竜馬が寺田屋で襲撃された時、お竜の素早い機転は見事竜馬を救う事になったのです。「お竜よ、もう一度今度は宇宙で竜馬を救ってくれ！」そうした願いを込めて芸西天文台で発見し命名したのが小惑星 (5833) ORYON です。お竜の星はぐんぐん夜空を駆け、やがて竜馬と新撰組の星の間に分けて入って行きました。暫く三つ巴の形で飛んでいた星たちは、やがて新撰組の星が遅れ始め、竜馬とお竜は永久に宇宙の中でラブ旅行を続ける事となりました。

「あなた、それにしても私たち二人をこうして星にしてくれた人は一体何処のどなたでしょうね」と、お竜。

「ワツハツハツ、いつぞやわしの生まれた空家ではたえていた関とか言う洩垂れ小僧がやったらしい、あの餓鬼もなかなかやるのう、ワツハツハツハ」

宇宙からふとこのような竜馬の豪傑笑いが聞こえてきたような気がしました。

二〇〇五年一月二十五日、竜馬の生まれたこの日は、竜馬の果てしない思想を称えるかのごとく限りなく晴れ渡って

いました。

第七話 宇宙に去った竜馬

ハレー彗星と共に宇宙からやって来た竜馬は、いま小惑星二八三五号となって再び宇宙に帰って行くことになりました。思えば海援隊長として海に乗り出した竜馬は、後藤象二郎と「船中八策」を作って近代航海術を教え、さらに陸では中岡慎太郎等と薩長連合を図って大政奉還への道を推進させました。しかし人間的には大柄だとか、ルーズだとか言っただけで批判も浴びましたが、そこは豪傑にありそうなこと。政治的には大きな仕事を残して天上の人となった訳です。

二〇〇五年の夏のある日、芸西村の天文台にやって来たわたしは、久し振りに望遠鏡を『竜馬の星』のある方向に向けてみました。そこには赤い星が一つ、多くの微光星たちを押しよせるようにして力強く進んでいます。

「オーイ、坂本先生！ 宇宙遊泳の気分は如何ですか？」
私は思わず叫びました。

「うーん極めて爽快じゃ」
と竜馬の遠い声。

「一緒のお竜さんはどうされたのですか？」

と聞いてみました。すると、

「あれはいま里帰りじゃ。それにしても宇宙はでかく広いのう。」

と、やや興奮したような竜馬の声が返ってきました。

「坂本先生、宇宙から見て、今の日本をどのように思われますか？」

これは私が一番聞きたい質問でした。

「そうじゃのう。世界の政治家たちにこの大宇宙を見せることじゃ。そうすればちっぽけな星の上での争いなんか起りゃせん。ワツハツハツハ、、、」

竜馬の声が凜と響き渡りました。星の世界に行っても相変わらず太い竜馬でした。

第八話 新撰組始末記

旗にシンボルの『誠』の字をかがげ、剣一筋に生きようとした新撰組の隊士たちは、官軍の近代兵器の前に次々と倒れていきました。新撰組の壊滅後「甲陽鎮撫隊」として出直した隊長の近藤勇は官軍に捕らえられて打ち首。その首は京の三條大橋の河原に晒されました。



三條大橋付近の鴨川

一方、副隊長だった土方歳三も遠く函館の戦線にて討ち死にし、沖田総司は病死。剣豪三本柱の一人、永倉新派八だけは明治の新時代を迎えました。かつて池田屋で新撰組と斬りあったことのある浪士の一人が明治になっ

て、京の四條大橋の上でこの永倉とバッタリと出合ったそうです。暫く宿敵と睨み合った時、杖を持つ永倉の手はワナワナと震えていたといえます。かつての剣豪の面影は微塵もな

く、そこには一人の背のかがんだ老いぼれが、まるで許しを乞うように立っていたといいます。一時代を画した新撰組の隊士であっただけに哀れです。

その頃、無論竜馬はいなかったのですが、竜馬の死後お竜は永く生きました。何か国家の重大な事件が起こると、

「ああ、竜馬がいたらなあ」

と言うのが彼女の口癖であったと聞きます。

さて時代は、それから半世紀以上も飛んで、昭和の初め頃の第四小学校の講堂です。開校一〇〇年を誇る古い講堂の天井に掲げられている竜馬の肖像画をじっと見上げている一人の少年がいました。竜馬の生まれた空家で、竜馬に「はなたれ小僧」と言われたあの餓鬼です。竜馬と同じ上町に生まれた少年は、やがて成長して、竜馬とお竜を宇宙に送り出すと言う数奇な運命を辿ることとなるのですが、これから始まるは、少年の星と暮らした波瀾の半生記です。

第九話 『未知の星を求めて』 エピソード 一

この本が出版されたのは古く一九六六年ですが、いささかのエピソードがありました。そのそもその出発点は一九六四年にさかのぼりますが、地方のあるテレビ局で「星空への憧れ」というタイトルで座談会をやったのが事の起こりでした。参加者は私のほかに、古くからのコメットハンターたる池幸一氏と、今は亡き有名な竹林寺住職の海老塚龍雄氏の三人でした。新春のことで大空に向っての大きな夢を語ったのですが、この番組を見ていた高知新聞社の学芸部のH記者が「これは面白い」と思って、私に学芸欄での連載を書かせてみようと思ったのが、事の起こりでした。

数日後H記者が来たとき私は「ハッ」としました。『大昔どっかで会った人だ』と思いましたが、彼の説明によると幼稚園が一緒だったそうです。

連載は「関・ライズ彗星」発見の下りから始まりましたが、意外に大きい反響がありました。外部からの電話や投書は無論、明日の続きを待つ場面では、社内の人待ちきれず

に編集部へ次の原稿を見に来る始末で、担当の記者は第一回を発表したところで、この連載の成功を確信したと言います。

連載は「星空への招待」というテーマで四〇回に渡りましたが、その最終日がある「池谷・関彗星」の発見の日であったことに、運命の不思議を感じます。

この新聞連載によって県内のたくさんの人からの手紙や訪問を受けました。それまでどちらかと言うと孤独にこもりがちだった私が一気に外交的となり、嫌いだった多くの講演をこなすようになりました。ある日の一人の記者の訪問が私の大きな出逢いの場となったわけです。

暫くして土佐山田町のMさんというご婦人がやってきました。その人の父は古い天文家で、何でも明治時代に彗星を発見して、夜中の三時に東京天文台に電報を打ったといいますが、それが何であったか判然としませんが、そのような古い時代にこの土佐にコメットハンターが居たとは驚きです。

明けて一九六六年の春、この連載が本になりました。東京と高知で出版の記念会を行いました。最初に買ったある若い女性からの手紙に『私が先で人生に失敗するような事がある

ったとしたら、もう一度この本を読み返してみたい。「との
読後感があり心を打たれました。この本は星を語る本と言っ
より一種の人生読本でもあったのです。

第一〇話 『未知の星を求めて』エピソード 二

一九九八年ごろ講演会があつて福井県武生市の松本敏一さんのお家を訪ねたことがあります。その時「サインを」と言つて持つてこられたのが初版本でした。どこの講演会へ行つても必ず本をもつて熱心な方が後で話にこられますが、「未知の星を求めて」には三つのバリエーションがあり、最初が東京のある印刷会社が発行した、彗星のカラーの表紙の文庫本で、二回目「三恵書房」が一九七三年に出したB六の表紙に無数の星の流れをデザインした綺麗な本です。そして三回目が一九九〇年ごろ私が自費出版した今の地味な表紙の本です。

聴衆の方がどの本を持つてくるかで、大体の年齢が分かります。懐かしい最初の本を持つている方は、若くても五〇歳をとつくに過ぎているはずです。松本さんとは最初の本を発行したときからのお付き合いで、ご長男に「勉」と名付けられた事でも如何に私を愛し尊敬して下さいるかわかります。松本さんは優れた彗星の観測者であるわけです。

が、最近彼の名を芸西で発見した星に付けたのも松本さんに対する尊敬と感謝の念からです。その彼に、

「この本でどこが一番気に入りましたか？」

とお尋ねしたら、即座に、

「同じ敗北するにしても、自己の最善を尽くした上で敗れたよ」

と言う自己への叱責の言葉に感動した、といってくれました。

そうですね、忘れていました。私が発見前の一九六一年の九月「三嶺」と言う深い山へ登り、峻険な斜面と嵐に行く手を遮られ苦闘していた時、彗星の発見を志しても一向に成果の挙がらない自分を見つめ、「まだまだ努力がたりないんだ！」と自分自身を叱責した言葉でした。

そうですね！あの深い谷の中で私の思想が変わり再び発見の情熱が蘇ったのでした。

私は今でも、何処へ行く時でも、あの本をバイブルの如く身に付け持っているのです。

第一一話 『未知の星を求めて』 エピソード 三

新聞連載の「星空への招待」が初めて本になった一九六六年四月、千鳥が淵のヘヤモンドホテルで記念会が催されました。この日は同じコメットハンターの池谷薫さんを招待し、東京天文台から台長の廣瀬秀雄博士や下保茂氏、五藤光学の五藤斉三氏。それに村山定男氏や天文ガイド誌編集の田村栄氏もお招きしました。一方高知県では六月に高知大学の先生がたを中心に、県内の文学関係の人たちが集まってささやかな記念会が催され、連載を企画したH記者や作家のSさんに、友人の池幸一氏も参加して下さいました。

中には変わった人も居られ、一般から参加した土佐山田町の森本夫人は、大昔お父様が肉眼彗星を発見された意外な話を披露されたのですが、それは年代から推測して井上四郎氏が独立発見した「ボレリー彗星」ではなかったかと思われましたが判然としません。

また自分で新聞を発行しているというOさんは自己紹介の時「私は関さんにお会いするたび敬礼をする」といって人

を笑わせましたが。そう言えば彗星を続けて発見した一九六二年頃から、道で会った人に必ず立ち止まって拳手の敬礼をする人がいて、長く疑問に思っていたのですが、この会でその疑問が解けたわけです。氏は私に尊敬の念をこめて「ハッ」という掛け声と共に不動の姿勢から敬礼をされていたわけです。○さんは暫く自分で発行する「県民新聞」を送って下さっていました。最近はずっぱり来なく、消息が途絶えてしまいました。

なおこの記念会で余技として ・ガリレイ作曲のリユート曲、「シシリアーナ」をギターで演奏しましたが、実は作曲者のヴィンセント・ガリレイはあの有名なガリレオ・ガリレイの父で彼は有名なリユート（ギターの前身）の奏者だったのです。

一九五九年、大セゴヴィアが日本に来て大阪中ノ島のフェスティバルホールで演奏会を開いた時、ガリレイの曲が始めて日本で紹介されました。「リユートのための六つの小品」で、その時三〇〇〇人の大聴衆の中にまだ彗星発見前で人生に敗れ苦闘していた二八歳の私が居ました。

第一二話 冥王星狂想曲

今年のプラハにおける国際天文学連合の総会で兼ねてから噂されていたように、太陽系の第九番目の惑星である「冥王星」が矮小惑星としてその座から降りることになりました。

惑星としてその条件を十分に満たしていなければ止むを得ない事ですが、いままで七六年もその座について来ただけに、聊か残念で淋しい気がします。他の矮小惑星が、いずれも大口径鏡でないと見られないのに対して、冥王星はアマチユアが所持する比較的小さな器械でも観測され親しまれてきただけに、理屈はともかくとして例外として残して欲しかったですね。第一、発見者のトンボーさんに対して気の毒な気がします。カイパーベルト上にさらに存在する矮小惑星たちの発見と違って、冥王星の発見は世界の学俗界を揺るがす大発見であったはずです。そして太陽系の最果ての星を意味する「冥王星」という名が素敵です。学術的に硬いことばかり考えるのではなく、ユーモアも欲しかったですね。いま冥王星に向っているアメリカのロケットの中にトンボーさん

の遺灰が積み込まれているそうですが、冥王星発見者としての偉業は消え去るものではないと思います。

さてここでトンボーさんに纏わる誰も知らないエピソードを紹介しましょう。

あれは今からもう三〇年にもなりましょうか。イギリスのBBC放送が「宇宙の驚異」と題する映画を作製するために、世界中の天文台や学者を取材して回ったことがあります。プロデューサーとカメラマンたちは多くの機材を持って日本にも来たのですが、そのプロデューサーのAさんは、その頃アメリカのアダムスキー等によって広められた未確認飛行物体、即ちUFOの実体を探ろうと世界中の一〇〇人に近い天文家に会ってそのことを質問したそうです。無論天文学者はその存在を否定しました。ところが一〇〇人のなかで一人だけが「存在する」と答えたそうです。そしてその方は「自分の研究している天文台の上をよくUFOが周っている」と言ったそうです。そのUFOの存在を認めただ一人の天文学者がなんとトンボー氏だったのです。トンボー氏はローウ

エル天文台での勤務の傍らにRFTと称する特別に視野の広い反射鏡を自作して、この種の飛行体を搜索していたそうで、Aプロデューサーの見たところ木製の四角い筒の中には一二センチメートルの短焦点反射鏡が入っており、倍率は一四倍。筒を抱くようにして椅子に座り天空をパトロールしていたそうです。これを適当な架台に載せると、そのまま有力なコメットシーカーになりそうです。そうですトンボーさんは生涯の大半を太陽系の未知の天体の搜索に捧げた人だったのです。

第十三話 蔡章猷氏のこと

台北天文台に勤めていた天文学者の蔡章猷氏がお亡くなりになったとの報に接したのは、つい一ヶ月ほど前（二〇〇九年四月）のことです。

率直に言って私は蔡氏のごことは、余り良く知りませんが、ここで改めてご冥福をお祈りしながら、思い出を辿ってみました。

あれは今から二十年ほど前になるでしょうか、台湾から蔡氏が来て、日本の天文台を視察している、との情報が五藤光学から寄せられました。

何でも台北の天文台に大きな反射望遠鏡を入れるとか言うことで、我々の芸西天文台にもやって来られました。五藤光学の留子夫人によると、戦時中は日本軍の憲兵だったそうで、温厚な人柄の中にも、なにか眼の鋭さに、それを感じました。

蔡氏は我々の東亜天文学会の会員で、私の発行する「コミットブレテン」を暫らく購読して居られました。芸西天文台

で面会したとき、彗星のパトロールもやってみたいと、意欲を示していました。OAAの創始者で初代会長の山本一清博士が一九二八年、山崎正光氏によって「クロムメリン彗星」が発見されたとき、それを追って台北まで出張されました。其のとき天文台で出迎えたのが、この蔡氏であったと言われているのですが、定かではありません。それ以来山本博士と親交が出来、南からの貴重な観測記録を山本氏の所へ送り、当時の「田上天文速報」を賑わしていました。

田上（たなかみ）速報と言うのは一九四八年頃から田上天文台の台長だった山本博士が発行していた、手書きの天文ニュースで、後の「山本速報」です。

当時は日英二本立てで書かれ、内外に約一〇〇通が発行されていました。台北天文台での観測の記事は度々紙面に紹介されていました。今思い出すと一九五五年ごろ、不思議な天体を見た報告が掲載されたことを改めて思い起こします。時は正に春たけなわの頃、夕刻の頭上に大熊座の北斗七星が大きくかかって、それを見ていた蔡氏は異様な光物が飛んでいるのを発見して、山本氏に報告してきました。其の光物と

いうのはゆっくりと、まるで大熊座を取り巻くように何回か回って消えたそうです。彼のスケッチが山本速報に発表されましたが、その運動は大きな四角形でした。無論人工衛星も無い時代で、飛行機や流星でないとすると・・・？ 蔡氏は報告の最後に「これはアメリカのアダムスキーの唱える『空飛ぶ円盤』の類であろうか・・・」と述べています。

前回には、あの冥王星の発見者のトンボー氏がそれを信じる話をしましたが、蔡さんも、それ以来UFOというものを信じていたのでしょうか？しかし当のアダムスキー氏は、終の床の中で、側近者の質問に答え、それを否定したことは、その後伝えられた通りです。

第一四話 老人星カノープス伝

もうかれこれ二〇年になるでしょうか。ある冬の夕まぐれ私は犬を連れて上町の自宅に近い町並みを散歩していました。このあたりは旧、築屋敷町と言って古い石垣の連なる住宅街で、聞くとところによると、坂本竜馬が修行に通った剣術の道場の在った所と伝えられています。そう言えば奥の方から竹刀の打ち合う音が聞こえてきそうな静寂な道を歩いてみると、向うから一人の老婦人が急ぎ足に歩いてきます。すれ違い際に、「あっ、もしや星の関さんではありませんか?」と声をかけられました。「そうですが、あなたは、、」と答えると、婦人は、「やはりそうでしたか。ああ良かった。実は私はもう八〇歳が近くなりました。此の世の見納めにカノープスを見たいと思って今から見晴らしの良い海に出かけるところです」と言った。

「それはいいことですね。カノープスを見るには桂浜か種崎あたりの海岸が良いでしょう。カノープスは中国では老人星と呼んで、一度見ると長生きするといふ言い伝えがあります。

ぜひ観測して長生きしてください」と私は半分冗談交じりの言葉をかけて老女を見送りました。

カノープスとは南半球に位置する「りゅうこつ座」の一等星です。大犬座のシリウスに次いで、全天で二番目に明るい恒星ですが、南緯五二度の空にあって、日本からの観測が非常に困難です。高知県は北緯約三三度ですから、条件の良いとき南の地平線上僅かに四度に見えます。このカノープスを見ようと思えば、冬から春にかけての時期に、南の地平線に見える場所に立って、南の中空に輝いている全天一の明るいシリウスを先ず見つけ、それから視線をズーッと下に降ろして行くと、地平線すれすれの所にカノープスの光を発見する筈です。

やがて、それから一〇年の歳月が流れました。あのお年寄りは無事カノープスを見ただろうか？いまでもお元気だろうか、と時折考えていました。安芸郡芸西村の「天文学習館」では毎週天文台の一般公開が行われ、星を見る会が催されています。それは夏の公開の日でした。丁度「ヘール・ボップ彗星」と言う大彗星が見えている頃で、天文台は賑わってい

ました。会が終わった時、一人の老婦人が近づいてきました。私は「ハッ」としました。どこかで見た人です。

お年寄りにはにこやかな笑みを浮かべて語りました。

「いつぞやカノープスのことで大変に御世話になりました、、、、」

「アッ、あのときの方でしたか？あの日カノープスは見えたでしょうか」と尋ねると、

「有難う御座います。あの晩、実は桂浜の竜馬の銅像のある高台に行ってカノープスを探したので御座います。しかし素人のゆえに目指す星はなかなか見付からなかったのです。でも折角タクシーで遠路やって来たのですから、諦め切れずに竜馬の銅像を見上げていたのです。そして何気なく竜馬の見つめている東南の海に目をやりましたところ、水平線上に低く光るものが御座います。明らかに星です。その明るい星は時間の経過と共に、まるで海を渡るように南の空にやってきますますます強く輝きはじめました。すぐ上空には普段見慣れた大犬座のシリウスが光っています。私は嬉しくて思わず万歳を叫びたい気持ちで、教えてくれた竜馬先生の銅像に手

を合わせて拜んで帰りました」と、老婦人は感激したように語りました。

「そうですか、良かったですね。いつの時代でも先見の明があり、時代をリードした竜馬は、星のことでも知っていたのですね」と冗談を言ってご婦人と別れました。婦人は孫らしい若い女性に手を引かれるようにして、元気な足取りで山を下って行きました。

第一五話 初めて星を見たころ

天文学を始めたばかりの私はカノープスを見たことはありませんでした。それはまだ若かったので「老人星」にはあまり興味が湧かなかったことと、家が上町の竜馬の生まれた家の近くにあって、ここからは南に聳える鷲尾山に隠されて見えなかったのです。

初めてカノープスを見たのは一九六五年一〇月、須崎市に聳える標高七六九メートルの蟠蛇の森の上からでした。その頃、私たちの発見した「イケヤ・セキ彗星」が太陽に突入するという前代未聞の事件が起こり、彗星が爆発して消滅するのか、それとも太陽に異変が起こるのか、と言うので多くの天文学者が注目し、正に世界を震撼さす出来事が起ころうとしていたのでした。

宇宙を何万年かさまよい、苦勞して発見したその彗星が、太陽突入によって終焉を迎えようとしているとき、私は居ても立っても居られない気持ちになって高知県で最も星の良く見えると言われる蟠蛇の森にやって来たのです。そして初

めて見るカノープスの巨光に驚き感激し、じっと手を合わせ
て「どうか彗星が無事でありますように・・・」と、彗星の
長生きを願っての祈りを捧げたのです。その祈りが通じたの
か、その直後、ハワイのマウナケア（いま日本のスバル望遠
鏡がある）の頂上で驚くべき現象が目撃されたのですが、そ
のお話はまた後で詳しく語ることにして、今日は私が初めて
星に憧れたころのお話をしたいと思います。

物語は今から半世紀以上も昔に遡るのですが、私の父は高
知市の米田の出でした。毎年初冬のお祭りのある頃、父に連
れられて田舎に遊びに行っただけです。その帰り道の事です。
提灯を持って暗いあぜ道を歩いていた父が突然足を停めて、
「ほら勉、見てごらん三ツ星だよ」と言って低い山の上を指
差しました。

それは始めての星との対面でした。赤鬼山の稜線の上は山
の輪郭でさえも判然としない真っ暗闇ですが、煌めく無数の
星の中にとりわけオリオンの「三ツ星」だけがきちんと並び
群を抜いて明るく逞しく輝いているのでした。

父は若い頃砲兵だったそうで、善通寺の第一師団での兵役では夜の訓練で方角を知るために星を習ったそうです。多くの一等星を覚え、それらの配列から北極星を見つける訓練を行ったと言います。親戚の家から電車通りまでの僅か一キロ程の道のりでしたが、星の話ばかりしながら帰った楽しいひと時でした。

父の話の中で、特に興味を持ったのは明治四三年に現れたハレー彗星のことでした。ハレー彗星は七六年で太陽を一周しているのですが、その年の五月には異常に地球に接近し、まるで空を泳ぐ巨大な竜の姿となって地上に迫り多くの人を恐怖のどん底に落とし入れたそうです。

父の見たハレー彗星から実に七六年、一九八六年のハレー彗星接近の時には、私は南方のある孤島でこれを観測していました。南十字に懸かるハレー彗星の姿はとりわけ美しいものでしたが、こうして私が天文学をやるようになったのは父の影響もありますが、若い頃の一つの出逢いがきっかけでした。

人生と言うものはまことに奇なるもので、ある出来事との

出逢いによって、わたしは一生星を見つめる運命となったの
です。

第一六話 初めて星を見たころ（二）

倉敷天文台を本拠地として活躍した本田実氏は二〇一三年二月が生誕百年の記念すべき年でした。地元では記念行事が行われたようです。同時に発行された「星尋」という本にも本田さんの追悼の文を書きました。山での本田さんの観測所は「星尋荘」でした。

一九九〇年に有名な『本田・ムルコス・パジユサコバ彗星』が回帰した時、本田さんから、「芸西で観測に成功したら、是非写真を送って下さい」と依頼されましたが、悲しいかな本田さんは帰って来たご自分の彗星に誘われるように、天国に行ってしまったわけです。倉敷市で行われたご葬儀の日、私はお約束の彗星の写真を胸のポケットに入れて参列いたしました。

今年（二〇一三年）の四月三〇日に倉敷天文台を訪ねましたが、関係者は居ず、庭の片隅に木造の建築物が出来つつありました。歴史ある天文台の記念館でも出来るのでしょうか。一九五四年に初めてここを訪れて覗いたカルヴァー鏡や泊

まった宿直室もそのままあるようでした。

思いは遠く一九四八年に遡ります。高校生の時、はじめて『ホンダ彗星』発見のニュースを新聞で見ました。何でも二月の上旬、朝方のうみへび座に八等級の新彗星を発見したというものでしたが、その少し前に、やはり明け方の空に『マックガン彗星』という肉眼彗星が出現したこともあって、天文に対する興味が次第に増し始めていたのです。小さな手作りの望遠鏡で彗星に挑戦したのですが、そこは素人のこと故、成果は全く挙がりませんでした。

思えば終戦後の、日本がまだGHQの支配下にあって、日本人のうだつが上がらない時代に、次々に新彗星を発見して、国民を勇気づけた本田さんの姿に憧れたもので、この道こそ私の一生を貫く理想だと思ったのです。